

『食うか食われるか』

著：ふゆの仁子

ill：円陣闇丸

「……すみません。もうオーダーストップなんですが」

来客に気づいたのは、正塚だ。扉の向こうから現れた芦澤の顔を見て、一瞬その静かな顔に驚きの表情を刻んだ。

「正塚、誰が……」

正塚に遅れること僅(わず)か、奥の椅子に腰掛けていた椿が立ち上がり、顔をこちらに向けてくる。

逃げ出したい気持ちを堪え、椿と目が合ったそのタイミングで頭を下げた。

「一昨日は、失礼しました」

「——正塚。俺は厨房に戻るから……」

「待ってください」

むっとした様子で踵(きびす)を返すその後ろ姿を、必死に呼び止める。

「一昨日のことは、心からお詫びします。僕自身浮き足立っていて、大変失礼なことを申し上げたと思います。それについては、心からお詫びします」

小さく深呼吸をして、静かに言葉を続ける。

「——ですが、僕が貴方(あなた)の料理に惹かれ、貴方と一緒にお仕事をしてみたいと思った気持ちには嘘偽りはありません。この一か月、何日か食事をしにこのレストランに通って、それを実感しました」

ブリーフケースを持つ手が、緊張ゆえに微かに震えていた。この震えが体に伝わらないように堪えるのに必死だった。

「だから？」

しかし懸命な訴えにも、椿の返答は素っ気ない。最初から覚悟していたものの、それでも応(こた)えるものは応える。芦澤はぐっと拳を握り、椿を見つめた。

「お店の雰囲気、料理、調度品、食器、食材、スタッフのすべてにオーナーシェフである椿さんのこだわりが感じられました。先日、椿さんがおっしゃった言葉の意味も、お店を見れば伝わってきます」

芦澤の言葉を遮るように、電話が鳴り響く。

「俺が……」

「シェフはお話ししててください。私が事務所で取ります」

正塚がいち早く反応して、厨房の隣にある『事務所』なる場所へ向かっていく。

二人その場に残され、いたたまれない様子の椿は、皺を寄せた眉間を覆うように手をやってため息をついた。

「——それで、あんたは何を言いたいんだ？」

これ以上話を聞くつもりはない。芦澤に向けられた言葉は、棘(とげ)を孕(はら)んでいる。

「俺はこの間、断ったはずだろう？」

「でも、あのときはきちんとお話できませんでしたから……」

「きちんと話をしようがしていなかろうが、関係ない」

椿は前髪をざっとかき上げながら、ふいと横を向いてしまう。

「どうしてですか！」

「どうしても何もないだろう？ 俺は現状で満足して……」

「それは嘘です」

芦澤は椿の言葉を否定する。

「何が嘘なんだ」

「これまでに、何人ものレストランの起業家と話をして、共に仕事をしてきた経験があります。チェーンのレストランと、個人経営のこういったレストランでは、スタンスや求めるものは違うと思います。ですが、根底に流れるものは同じだと思います」

「根底に流れるもの？」

ちらりと、椿は横目で芦澤を見る。

「なんだ、それは」

「より美味しい料理をより多くのお客さまに、より楽しんで食べてもらいたい、という気持ちです」

椿は微かに眉を上げ、それから怪(け)訝(げん)な目ながらも、その瞳の奥に微かな光を感じた。芦澤の読みは間違っていない。だから、さらに続ける。

「先ほども申し上げたように、この店は素晴らしいと思います。けれど貴方というシェフは、ここで満足してしまう方ではないはずです」

ドクンと大きく心臓が鼓動する。

半ば賭け。半ば、はったり。

アメリカで、そして日本に戻ってから三年の間、実践により培(つちか)ってきた交渉術が芦澤にはある。正攻法だけでは勝利できない。

あくまで相手の心髄に触れ、相手の望むものを察知し、先回りをして、うまく結論を導き出すのだ。

言葉遊びではない。ただ、真実と真実を上手く噛み合わせるだけだ。

「ここでの成功ののち、心の奥底では、より大きなものを求めている——違いますか？」

心を探るように、静かな声で問う。

瞳を逸らすことなく、奥で揺れる一点の炎だけをじっと見つめて。問われた椿もまた、ぎろりと芦澤を睨み返してくる。一見すると静かな印象だが、いつ爆発するともしれない力を秘めているように思える。

二人を包む空気がぴんと張り詰め、緊張してくるのがわかる。

「一昨日にお話した件は、決して悪いことはありません。言葉が足りなかったせいで誤解を受けましたが、このお店のシェフである椿さんだからこそ、ぜひにと思いました。今現在あるものをないがしろにしようとは思っていません。今現在があつてこそ、お話ができるのです」

ひとつひとつの言葉を慎重に選びながら、椿に語りかけていく。

とにかく、話を聞いてもらわなくてはならない。最終的に否という結果になろうとも、自分がどんなつもりでいるか、椿に伝えたい。誤解されたままなのは、絶対に嫌だった。

「細かいことは何も決まってません。すべては、僕と、そして椿さんとの話し合いで決

めていけるんです。もちろん、こちらのお店の営業も続けられます。方法についてはご相談しなければなりませんし、スタッフの問題も出てくるでしょう。ですが、お互い納得いくまで話し合えます。決して不本意な形には—— |」

「なんでそこまで、俺みたいな人間相手に、必死に説明するんだ？」

眉間は寄せられたままだが、僅かではあるものの、椿の表情から陰しさが消える。もう闇(やみ)雲(くも)に突っぱねようとはしないということか。

「ぜひ一緒に仕事をさせていただきたいと思ったからです」

芦澤は素直に自分の気持ちを訴える。と、椿の口元に自(じ)虐(ぎゃく)的とも取れる笑みが刻まれる。それがなぜなのかと思う前に、椿はその答えを自分から口にする。

「俺がどんな人間かも知らずに、よくそんなことが言えるな」

喉の奥で笑いを堪えたその言い方に、微かな引っかかりを覚える。

「それは……」

「あんたが、俺をどんな男に見ているか知らないが、夢を語られても困る。俺はあんたの言うようなスケールの大きな男じゃない。自分の店を守ることで満足している、了(りょう)見(けん)の狭い人間だ」

乱暴な言い方で悪ぶってみせても、それが芦澤を引かせようとする演技だということは、あまりにも見え透いている。

「——信じません」

「信じる信じないの話じゃない。俺はそういう人間なんだ。それから」

一度言葉を切って、どうするのかとっていると、椿はつかつかと前に足を進め、不意に芦澤の腕を掴み、そのままぐっと引き寄せる。

「……？」

芦澤の見開いた目の前にあるのは、人のことを睨んでいた目。不機嫌そうにしかめっ面をしていた椿は、無造作に眼鏡を外す。そして不意に顔を近づかせたかと思った次の瞬間、芦澤の半開きの唇に生温かいものを強引に重ねてきた。

「——っ！」

声を発する余裕もなく、口(こう)腔(こう)内に侵入してきた舌が、ぺろりと人の歯の裏をなぞっていく。なんという生々しさ。驚いて逃げようとするが、腕を掴む椿の力は尋常ではない。

本文 p56～62 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>